Oh, Canada !

栗　原　武美子

昨年の夏，２年ぶりにカナダを訪れた。一口に感想を述べると，カナダは良くも悪くもやはりカナダであった。

先ず，ヴァンクーヴァーに着いたとたん，季節はずれの肌寒く雨降りの一まさに当地の冬の一天気が出迎えてくれた。住み慣れた土地ではあったが，このような天気は予想外で，セーター購入が第一の仕事となった。滞在した一週間のうち最後の二日間しかお天気に恵まれず，公園巡りができたのはわずか一日だけであった。

天候不順に加えて，折悪しくも始まった郵便のストには頭を抱えた。日本宛の郵便物はすべて，渡りに舟とカナダを訪れていた友人に託して，日本やアメリカから投函してもらった次第である。

トロントに移ってからは，夏らしい暑い日差しを浴び，長い日照時間を楽しんだ。但し，ストについては改善されず，むしろ悪化した。郵便ストが続行する中，今度は連邦政府職員のストとトロント市交通局の労働者のストが発生した。連邦政府職員のストにより，空港や国境での税関の機能が麻痺し，アメリカから部品の入荷が遅れた工場では，その操業にも差し支える有様であった。何とも皮肉としか言いようがないように思われたのは，新聞がこのような事態を報道する一方，いかにカナダの製造業の国際競争力を高めるか，といった記事を同じ紙面に載せていることであった。政府刊行物センターも利用できず，私の場合，購入する予定だった必要な刊行物を，ヨーク大学の図書館でコピーするはめになった。

最後の打撃は，トロント市交通局の労働者による全面ストであり，市内のすべての公共交通機関が，まる一週間ストップした。この全面ストは実に13年ぶりのことだった。足がなくなった私達は，大学や食料品の買い出しに出かける際は，すべて車を持つ友人頼みになり，非常に不自由な思いをさせられた。

カナダ人は，一体，ストなどの権利の行使を尊重し，それによって生じる不便さに対して忍耐強い。今回も多くの人々がスト権を認めていた。しかしながら，長引く種々のストに対して，いらだちを覚えた人も少なくなかった。目下，カナダ経済は不況の中にあり，失業率も10％程である。こうした状況の下で，郵便ストで一番影響を被ったのは，政府からの小切手を待ち望む失業者や，低所得者，そして年金受給者であった。また，公共輸送機関のストも，自家用車を持たない低所得者層の人々の方が，より大きな影響を被った。カナダの初秋に多発したストも，私が帰国する頃になってようやく収拾されることになった。

一方，カナダに戻って改めて広い居住空間や，物価安には感心した。国土が広く，人口が少ないカナダでは，最大都市トロントでさえ，日本の大都市と比べると，相対的に地価が安い。街並には，大きな家やアパートが立ち並び，庭や道路にも広々としたスペースが割かれている。年々価格が上昇しているとは言え，勤労者がトロントで一戸建ての家を持つのは夢ではない。

さらに，食費，衣料費，光熱費も，日本と比べると安い。ちなみに，カナダのガソリンの値段はセルフサービスの場合１リットル約50セント，パンやグレープフルーツの価格は，単純にドルを円換算すると，日本の約四分の一である。また，時間的にも，週休二日制と妥当な就業時間数の下で，人々は家族と夕食を共にし，週末には友人を招いてパーティを開くなり，ゆったりと生活している。

僅か一ケ月の滞在の中で，ストで不便さを味わうと同時に，生活の潤いを実感したことも事実である。不況を呈しながらも，なお数多くの移民を受け入れつつ，相対的に豊かに暮らせる懐の深い国，Oh, Canada!，と再認識させられた。